

スペイン語圏を知る本(その38)

樋口正義ほか編

# 『ドン・キホーテ事典』 行路社 2005

評者 坂東 省次

2005年はスペインの生んだ世界的名作『ドン・キホーテ』刊行400年の記念すべき年、すなわち「ドン・キホーテ年」であった。一年を通じて様々な記念行事が開催され、翻訳や研究書も刊行された。そんななかで最大の成果はと言えば、待望の書『ドン・キホーテ事典』の刊行であった。明治に始まる日本における『ドン・キホーテ』研究も、2005年を迎えてようやく『ドン・キホーテ事典』刊行の成果を生み出した。あとは10年後の2015年すなわち『ドン・キホーテ』後編刊行400年までに、日本初の「セルバンテス全集」の刊行を待つだけである。

さて、『ドン・キホーテ事典』である。1997年にセルバンテス研究とスペイン語圏の紹介を目的に設立された京都セルバンテス懇話会のメンバーが中心になって、合計34名の執筆者が加わり、2005年12月20日に刊行にこぎつけた。その日は生涯忘れられない記念すべき一日となった。『事典』は全8章からなり、400ページを超す大著である。各章のテーマは「I 作者セルバンテス」「II 名著『ドン・キホーテ』」「III 『ドン・キホーテ』名場面断章」「IV 『ドン・キホーテ』のことわざ選集」「V 基本語彙集」「VI ヨーロッパ文学と『ドン・キホーテ』」「VII スペイン黄金世紀文学と『ドン・キホーテ』」「VIII 日本における『ドン・キホーテ』」である。

本書を編集した一人として、いくつかの特徴を以下にあげておこう。

まず、本書には、1976年に『岩波講座・文学』第9巻に発表された『『ドン・キホーテ』はどう読まれてきたか』がおよそ30年の時を経て再録されている。名著復活である。著者の長南氏は終わりの方で大江健三郎氏の言葉を引用している。「・・・ラブレールを正確に読むこと自体が、そのままフランス・ルネッサンスの時代の全体の研究に展開し、そこに生きた人間のさまざまな個人の全体像の把握となり、自然にそれを越えて人類一般に向けての考察が現れてくる。」セルバンテス研究にたずさわるものに一つの規範とすべき理想像を提示してはいないだろうか。

『ドン・キホーテ』が日本を含めて世界の各国でどのように受容されてきたかもまた、興味深いテーマであるだろう。「VI」では、英国、ドイツ、ロシアそしてフランスにおける『ドン・キホーテ』の受容史をとりあげている。それらを読みながら読者は、『ドン・キホーテ』がこれらの国々のいかに数多くの小説家に影響を与えてきたかを知り、驚きを隠せないだろう。その代表は、ドイツの作家トーマス・マンである。「マンは、生涯でもっとも不安定な時期に、セルバンテスの小説を人生行路の同伴者に選んだ。ナチス・ドイツを逃れてスイスに亡命した後、1934年、彼はアメリカに向かう船上で『『ドン・キホーテ』とともに海を渡る』というエッセイを書いた。人生の危機に直面し、今や大西洋に漂うこの寄る辺なきヨーロッパの作家にとって、「世界の書物」である「オレンジ色のクロス装『ドン・キホーテ』4巻本」(ティーク訳)はかけがえのないより所であった。この「物語の海」に飛び込み、その大海原を乗り切ることは、彼の人生の新しい舞台、そして新たな創作活動に向かう第一歩に相応しい、象徴的な意味を持っていたのである。

本書は、『『ドン・キホーテ』関連書・邦訳作品解題』で終わっている。『ドン・キホーテ』に関する名著の紹介である。これに原典からの全訳、つまり会田由訳、永田寛定・高橋正武訳、牛島信明訳そして荻内勝之訳を加えれば、『ドン・キホーテ』を読む準備は万端である。あとは、『ドン・キホーテ』という大海に飛び込み、最後まで泳ぎきることだろう。『事典』を水先案内人として、一人でも多くの日本人が『ドン・キホーテ』を読まれることを期待したい。

ばんどう・しょうじ (教授・スペイン語学)